

論文の和文要旨

論文題目

現代韓国語の動詞の連体修飾構造に関する研究
—動詞の連体形と被修飾名詞の共起様相—

氏名 金 民

本稿は特定の連体形とともに頻繁に現れる被修飾名詞を手がかりに、現代韓国語の動詞連体形のうち, 하는 (V-는), 한(V-은/ㄴ), 할(V-은/ㄹ)を対象に, それぞれの連体形と高い頻度で現れる名詞にはどのような名詞があり, そのような現象が現れる語彙的・文法的条件を観察し, 記述することを目的とする. 本稿では, それぞれの動詞の連体形と高い頻度で現れる被修飾名詞を抽出し, それぞれの連体形をとる動詞, および被修飾名詞が連体形の表す動作・状態の主体か客体かといった動詞連体形と被修飾名詞との関係の観点から, 実際の言語資料の計量的調査, および分析を行った.

本稿で考察した結果は次の通りである:

1) 本論に入る前の基礎的な作業として, いかなる動詞が連体形をとりやすいのか, そしていかなる名詞が動詞の連体形の被修飾名詞として現れやすいのかについて考察を行った. その結果, 動詞は, 他動詞より自動詞 (비다 (空く), 적히다 (書かれる), 우거지다 (茂る), 끓다 (沸く)) のほうが連体形をとる頻度が高いことが高く, 自動詞の中でも, -이-, -히-, -리-, -기-といったヴォイス接尾辞を持つ受身動詞が連体形をとりやすいことがわかった. 被修飾名詞の属性を限定するという連体形の機能から考えると, 名詞の指し示す対象の様々な属性を表すためには, 形容詞, 及び形容詞的な自動詞が頻繁に使われている可能性がある.

次に, 動詞の連体形の被修飾名詞として現れやすい名詞には시늬 (ふり), (경우 (場合)) などの「抽象的な名詞」が多い. そして名詞が表す意味の観点からみると, 「動作」と関連するあれこれの概念を表す動詞が多い.

2) 動詞に連体形語尾「-는」がついた形式 (=하는(代表形)) と高い頻度で現れた名詞には, 次の種類があった.

<実体性名詞>

<交通手段名詞> : 버스 (バス)

<自然物名詞> : 바람 (風)

<抽象的場所名詞> : 단계 (段階), 세상 (世の中), 지점 (地点)

<関係概念名詞> : 비중 (比重)

<抽象的名詞>

- <感覚名詞> : 소리 (音), 냄새 (匂い) など
 - <様子名詞> : 기색 (顔色), 눈치 (様子) など
 - <動作名詞> : 시늉 (ふり), 작업 (作業) など
 - <反復的動作名詞> : 버릇 (癖), 습관 (習慣) など
 - <経路名詞> : 길 (途中), 과정 (過程) など
 - <動作関連名詞> : 방식 (方式), 재미 (楽しみ), 한편 (一方) など
- その他の抽象的な事柄を表す名詞 : 비중 (比重), 의미 (意味) など

上記には表していないが, 한편 (一方), 도중 (途中), 순간 (瞬間) のような時間名詞は하는節と繋がり, 全体として接続形として機能する.

これらの名詞と하는と共起する環境を調査した結果, 하는をとる動詞に<一定時間継続する動き>を表す動詞, および<時間の中で現象しえない関係概念>を表す動詞が非常に多いことがわかった. そのような動詞は動態性がある<実体性名詞>と格関係を結んで現われたり, 動作と関連する事柄を表す<抽象的名詞>と内容補充の関係で現れ, 하는連体修飾構造の典型的な型になっている. <動態性>を持つ<実体性名詞>や, <動作>と関連する何らかの事柄を表す<抽象的名詞>は他の名詞より, 하는連体修飾構造を好んでとっているグループである. <継続する動き>の主体となりうる名詞の属性<動態性>と「方法」「傾向」など, 「動作」と関連する何らかの事柄を表す名詞の属性が「継続」を表す하는と呼応しやすいと考えられる.

3) 動詞に連体形語尾「-ㄴ/-은」がついた形式 (=한(代表形)) と高い頻度で現れた名詞には, 次の種類があった:

- <モノ名詞> : 사진 (写真), 편지 (手紙) など
- <身体名詞> : 머리 (頭), 몸 (体) など
- <後的時間名詞> : 뒤 (後), 직후 (直後) など
- <既然名詞> : 혐의 (嫌疑), 기억 (記憶), 배경 (背景), 사실 (事実) など
- <状態名詞> : 상태(状態)など

これらの名詞と한と共起する環境を調査した結果, 한をとる動詞には「하고있다」をとれない<非하고있다動詞>, 及び特定のアスペクト形式 (하고있다, 해있다) をとって「動作の結果の継続」を表し得る<結果継続動詞> (붙다 (付く), 입다 (着る)) が多い. その他に한をとる動詞には, 만들다 (作る), 붙이다 (貼る) など, 「生産」や「加工」など, 動作の及ぶ対象になんらかの変化をもたらす動詞が多い. この種の動詞は한の形で新たな状態の発生を表しうる点で共通性を持っている. そのような動詞は生産物的属性をもつ<モノ名詞>と格関係を結んで現われる. この際, 名詞は動詞に対し, 基本的に「主格」「対格」または, 動作の終了と関連づけられている「예格」の関係にある. <後的時間名詞><既然名詞><状態名詞>も全体的に<非하고있다動詞>や<結果継続動詞>との頻度が高いが, 名詞によってばらつきを見せる.

「モノ名詞」の「結果物性」や「身体名詞」の「場所的終点性」が「完了」を表す한と呼応しやすい.

4) 動詞に連体形語尾「-ㄴ/-을」がついた形式 (=할(代表形)) と高い頻度で現れた名詞には, 次の種類があった:

- <事前名詞> : 계획 (計画), 준비 (準備), 예정 (予定) など

<意志名詞> : 각오 (覚悟), 궁리 (考え), 엄두 (思い, 勇気) など
<可能性名詞> : 염려 (心配), 우려 (おそれ), 확률 (確率) など
<要件名詞> : 권리 (権利), 능력 (能力), 도리 (方法) など
<当為名詞> : 의무 (義務), 책임 (責任) など
때 (時), 정도 (程度)

未然の事柄について何事かを表す<할志向名詞>は, 할と上位節の-이다 (だ), 있다 (いる), 없다 (ない) のような用言とともに, 話し手の心的態度を表す一種の文型として使われる傾向がある. <할志向名詞>は할と「外の関係」の構造で現れ, 할をとる動詞の種類や할の意味などを制限する傾向がある. 例えば, 普通, 할の意味はそれをとる動詞, 被修飾名詞, 上位節の用言などの多様な要素によって決められるが, 被修飾名詞が「意志名詞」である場合は, 할をとる動詞は基本的に「意志動詞」であり, 할の意味も「意志」に制限される. そして上位節には主に, -이다 (…だ), 있다 (ある), 없다 (ない), 「하지 마/마라」 (…しないで) のような用言が来る. また, 할をとる動詞には全体的に意志動詞が多いが, 「可能性名詞」の場合はそれを修飾する動詞が無意志動詞である場合が多い.

때 (時) は할とともに, 할節と上位節の時間的關係を表す接続形の機能を果たす. 一方, 정도 (程度) は「할 정도로」(するほどに), 「할 정도이다」(するほどだ) の形式で, 強調の機能を果たす. 할は「非現実」を表すが, 때 (時), 정도 (程度) を修飾する할は「非現実」を表すと言にくい.

本稿では, 基礎資料に基づいた頻度情報を用いることで, 各々の動詞連体形と共起しやすい被修飾名詞の種類を「程度性」という観点から効果的に記述することができた. そして被修飾名詞と各々の連体形の共起条件を明らかにする過程において, 하는, 한, 할それぞれが構成する連体修飾構造は固有の特徴を有することを明らかにした. さらに, 時には被修飾名詞によって, 時には動詞と被修飾名詞の組み合わせによって, 連体形の表す意味が制限される場合があることを解明した.

以上のことから, 本稿では動詞の連体形との共起様相から見た名詞分類の可能性を示すだけに留まらず, 被修飾名詞の観点から動詞連体形の特徴を明らかにすることができた. さらに, 動詞の連体節と被修飾名詞, 及び上位節にまで及ぶ連体修飾構造における特徴も明らかにした.